
夢を追う者

星野タクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を追う者

【Nコード】

N7776V

【作者名】

星野タクト

【あらすじ】

高校二年の夏のとある日、学校の帰り道。僕の運命は大きく変わった。自称「正義の味方」の厨二病末期な少女二人組に捕まり、見かけだけ「強そう」な魔物退治に巻き込まれ。頼む、どうか僕に突っ込む余裕をくれ！！このべた過ぎる展開につつまさせてくれ！！ホラーのようなまったく違うようなギャグストーリーです。更新はとっても不定期。

第一話 厨二病末期な彼女と流されやすい僕

目の前のものを静かに見据え、僕はさびたロボットののような手足を懸命に動かしてゆっくりと後ずさった。

野生の熊と出会った時は、目をそらさずにゆっくりと下がるという。それは化け物相手でも同じだと僕は信じている！

全身が鳥肌だっているにもかかわらず汗をかくというのは実に不思議だ。そして目の前の光景のほうがさらに不思議だ。

優に乗用車一台分を超える大きさの、ぼさぼさの茶色の毛皮をした、狼。

ちなみにニホンオオカミは明治時代を最後に絶滅したといわれています。現在日本には狼はおりません。世界を見てもこんな巨大な狼はいないけどね！

狼は闇色の瞳をらんと輝かせ、一步前に踏み出した。牙をむき出した口元からぼたぼたとよだれが滴り、アスファルトの上にしみを作る。毛並みはひどく乱れ、ところどころ毛が抜け落ち地肌が見えている。腹部は哀れなほどにやせこけ、あばら骨が見えそうだしや、だから餌になってあげる気はないけどね？

狼さん、軽く上体を沈めた。飛びかかる気ですネはいそうなのですね。

「つてぎけんなああああつ！！」

とりあえず、手に持っていたかばんを狼めがけてぶん投げた。飛びかかれたら死ぬじゃないか！あの鋭い爪でじゃれつかれたら一発で病院行きだ。

顔面に向かって放られたかばんは、狼に当たる前に叩き落とされた。まあ、一瞬でも生きる時間が延びたさ。

全力ダッシュで狼に背を向け走り出す。最後の悪あがきだ。後ろから狼が追いかけてくる足音が聞こえる。

だんっ、と地を蹴る音が聞こえ、とっさに避けようと横に転がる。だが、狼は飛びかかっては来なかった。

「三十一話目人食い人狼、さようなら。See you again」

横に転がりながら僕が見たのは、塀の上から跳び、その手に持った剣を狼の上に振り下ろした、少女の姿だった。

後頭部でくぐられた癖のある黒髪が、蛇のように空中でくねる。学校指定とは明らかに違う袖なしのセーラー服にひらりと舞い上がる短いスカート。パンツはピンクで……げふんげふん。ソックスは黒のニーハイソックス、靴はかかとなしのブーツ。手には手甲をつけている。腰には太い革のベルトが巻いてあり、それに鞘がくくりつけられていた。

剣が狼に食い込んだ瞬間、狼はまるでプロジェクターのスイッチを切ったかのように掻き消える。一拍おいて、少女のだんっ、と着地した音。

そのまま少女、しゃがんだ格好で動かない。あれ、よく見ると涙目。

「いったあ……この靴、まったく衝撃吸収しないじゃないの……」

……」

衝撃がもろ足に来ていたようです。そのまま下に下りるように跳ぶならまだしも、狼の上に跳んでたからね。

というか、なぜに剣。あとその衣装はコスプレか何かですか。まさかこの格好で学校帰りですなどとは言えない。

「うー………っし、その青年、無事ね」

やっと痛みが引いたのか、少女はゆっくりと立ち上がりながらそう言った。骨が折れてなくてよかったですね。

「無事、だけど」

「そう！それは良かった。そしておめでとう、あなたも今日から非現実の経験者よ。孫に自慢できるわね」

いや、自慢できないよ。そのまま老人ホームに放り込まれるよ。

「というか、君、誰？」

そういうと、良くぞ聞いてくれましたとばかりに少女は笑顔を浮かべ、あまりない胸を張ってこう言った。

「私は神宮寺茜。この町を守る正義の味方よ！」

………そうですか。痛い娘だったんですね。

「……あ、何その憐れむような目は。命の恩人に対する態度とは思えないわね。お礼とか、言ってくれないの？」

「助けてくれてありがとー正義の味方さん」

棒読みでそう言えば、深々とため息をつかれてしまった。

「まあいいわ。ところであなたはなんていうの？」

「池上修平。山上高二年」

「あ、それじゃ私の先輩か！よろしくー！」

よろしくて。こっちはあまりよろしくしたくないんですが。

「それじゃ修平、あなたに素敵な提案があるんだ」

「いきなり呼び捨てなんだ……」

「うん、あなたにも————」

「それじゃあさようなら」

あなたにもって何だあなたにもって。僕にも何をさせる気だ。

三十六計逃げるにしかず、僕はくると方向転換をし、歩き出そうとしたのだが。

「一緒に正義の味方をやってほしいんだ！」

がしっと腕をつかまれ、んなことをぬかしてくれやりました。

「ごめんね、僕はスーパーマンでもなんでもなくただの一般市民だから」

「あなたの反射神経、鍛えれば強くなるわ！それに、ちゃんとした知識をつければあれぐらいあっさり倒せるようになるわよ」

「いや、知らないから」

「今なら聖剣エクスカリバーと変身コスチュームも無料でついでくるわよ。相方オリジナルの世界でひとつだけの変身セット、いかがかしら」

「いやいらないし」

というか相方いるのか。こんな変人がもう一人いるのか。

「そんな……私を見捨てて行くと言うの……？」

「……そんなに僕を正義の味方にしたいの君？」

すぎるようなその声に折れたわけではなく、半ば呆れてそう言う。

「そりゃ、仲間は多いほうがいいから」

にここに、痛い茜さんはそう言いました。

「とりあえず、話だけでも聞いていってよ。ね？」

いつから正義の味方は勧誘制になったのでしょうか。

このままだと埒が明かれないと思った僕は、ため息をついて

「話を聞いただけだよ」

と、折れた。

「とっもみー！！一匹釣れたわよー！！」

いろいろと突っ込みたい台詞と共に、茜は玄関の扉を勢い良く開け放った。ちなみに玄関の表札は川内だったので、茜の家ではないはず。

「茜、玄関の扉は静かに開けなっつていつも言ってるよね」

奥の部屋から、少女が姿を現した。

ボブカットの黒髪に、冷ややかな釣り目。茜が陽なら彼女は陰だ。茜の友達であるならやはり痛い子かと思ったが、彼女がごく普通のTシャツにジーンズのいでたちだった。シンプルなもの、彼女に良く似合う。

「この子は川内智美。私の同級生で相棒よ」

茜がそう紹介すると、智美さんは僕のほうを冷え切った目で見た。

「で、君が茜に釣られた人？」

「強引につれてこられた池上修平です」

ふうん、とそっけない返事だけで、僕らは部屋に通された。

「狭いけど、適当に座って」

部屋に入って、いきなりぎよっとする。

ででん、と机の上に置かれたむき出しの刀が目に入ってしまったのだ。

おっかなびっくりそれに近づき、凝視する。すると後ろから声が

かけられた。

「残念だけど、それは偽物だから何も斬れないよ」

ですよねー。本物があつたら引いてたよ。いや、模造刀が机の上にどどんと置いてあるのもどうかと思うけどさ。

「で？ あんた、どこまで説明してつれてきたの」

部屋においてあつたちやぶ台を囲むようにして座ると、智美さんが言った。

「私たちが正義の味方だって言うところ」

「……………他人の前でそれ宣言して、恥ずかしくない？」

彼女はまともな精神の持ち主のようだ。良かった良かった。

「いやあ、だって正義の味方じゃん？」

「後始末してるだけって言うべきだと思うよ。まあ、そっちのほう
が厨二病患者が集めやすいかも知れないけど」

何だ、厨二病患者を集めてるのかこの二人は。

「……………まずは、ことの始まりから説明しようか」

ため息と共に智美さんが語り始めた。昔々この世界には何とかという悪の組織がとか言い出さないでくれよ…………という心配は、杞憂に終わった。

「事の発端は、私たちが行った百物語なんだ。百物語を終えた翌日

ぐらいから、話した内容そのままの怪異が実際に起きる様になった」

「百物語？」

少し拍子抜けだ。いや待て、それでも十分怪しいことに代わりはないぞ僕。

智美さんは軽くうなずくと眉間を押さえた。

「百物語は彼岸への扉を開く、という。ただ、さすがにそのときはそんなことかけらほども信じてなかったからね。実際怪異が起き始めたとき私たちは困ったんだよ。残念ながら都合よく正義の味方など現れたりもしない。んで、私たちはそれらに対し研究を重ねた。その結果、彼らは私たちにも倒せるほど、存在が薄いものだとなった」

「存在が薄い？」

茜が、こくりとうなずいた。

「私がぶん殴っただけでさっき狼が消えたでしょ？あいつら、見た目や凶悪性の割に衝撃に弱い。殴れば一発で消えるわ」

「なるほど、それで『知識をつければ倒せるようになる』と」

「そういうこと。で、そこで我等の中二病意識が少々開花しまして」

あれ、我等って言ったこの子。

「気付けばオリジナルコスチュームを作成し、本格的に正義の味方

としての活動を……」

「始めちゃったの？」

こっくり、と少女二人は大きくうなずいた。

「大体分かっていただけたかな。こういう経緯を持って、私たちは今正義の味方をやってます」

君たちが変わっていることを良く理解できました。

「で、ここからさっきの話に戻るんだけど」

戻さなくても良かったのに……

「私たちは現在二人で活動している。これだと、どうしても手が足りない。だから、協力者がほしいわけ」

僕はさっと目をそらした。知りませんよー、僕は無関係ですよー。

「別に茜のようにコスプレして戦えなんていわないから。ただ、退治をしてほしいってだけ」

「退治だけ、って言われてもねえ……」

「頼むよ。あと六十九回の怪異が我等を待っているんだ」

そんなに待ってるのか。なおさらやりたくないな。

「というか、何で僕なのか訊いていい？」

「狼相手の悪あがきっぷりに惚れたからよ」

「……そーですか」

茜から視線をそらすと、智美さんと思いつき目が合った。

「池上さん、だったね」

落ち着いたアルト。やばい、この人苦手かもしれない。

「できる範囲で良い。人助けだと思って、協力してくれないかな。これ以上、かわりのない人間を巻き込まないためにも、人員が必要なんだ」

僕もかわりのない人間だったはずで巻き込まれたくないんですが。という突込みが口から出てこない。できる範囲でいい、とか言われたら断りにくいじゃないか。

まあ、お遊びだとしても、ちょっと興味を引かれたのは秘密だ。

「……………わかった」

深い深いため息と共に、蚊の鳴くような声で僕はそう言う。

「僕ができる限り、協力する」

智美さんが、初めて柔らかな笑みを浮かべた。

「ありがとう、これで言質が取れた」

「……………はい？」

え、何言質って。

かち、と何かのスイッチを押す音がした。

「最後の会話、録音しておいたから。ちゃんとできるかぎり協力してよね。信用がおける人物だと信じてるから」

手を抜く気だったのバレてた————ッ!!!!

これで手を抜いたら信用を落とすって言う脅しですか。そうなのですか。本当にやりそうで怖いわ。

「ということは、僕の全力を尽くさなきゃいけない、のか？」

「そう、全力はできる限りに入るんじゃない？できないことは言わないから安心して」

策士だ！この人策士だ！！先輩手玉にとろうとはなんて危険な人なんだ！！

「まあ、あんまり無茶はさせないから安心して」

「……………安心できるかッ!!!!」

「まあまあ修ちゃん落ち着いて？ほら、エクスカリバー!!」

「いらないから！んでいつのまにあだ名つけてるのさ！」

「イッチーとかが良かった？某漂白剤の主人公とダブるからどうかと思ったんだけど」

「どっちもやだよ！あと結構マイナーなあだ名だと思うけどそれ」

主要人物が使うあだ名じゃないしなあ…………ってんなことはどうでもいい!!

「確か男性版の衣装の設定画ラフがどこかに…………」

「ほらほら修ちゃん、こっち来て衣装選んで」

「着るの!?!さっきはコスプレしなくていいって…………」

「……………できる限りって言っちゃったでしょ、君」

ふと、思い出したように智美さんがこちらを向き、笑みを浮かべ

る。

「ようこそ怪異対策本部へ。今日からよろしく」
.....。

そのネーミングセンスはどうかと思います。

第一話 厨二病末期な彼女と流されやすい僕（後書き）

ギャグに走らせていただきました星野タクトです。

この小説は一話一話区切った話にするつもりなので、かなり更新が遅いと思われます。

あと、キャラクターは基本全員まともなキャラじゃないです。主人公もすぐ流される上にすぐに厨二病患者になりますよーきつと。

ごちゃごちゃしないためにいくつか突っ込みをカットしてあります。主人公が突っ込んでいない場所にも突っ込んであげてください。

それでは、これから・・・・・・・・続きを気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776v/>

夢を追う者

2011年10月9日13時14分発行